

保護者の姿勢が教育に与える影響、その過去と現在 ムハマド・スプハン（インドネシア）

■ 過去の男女観

インドネシアでは、子どもに対する保護者の扱いは、男の子と女の子で違います。女の子には結婚の準備としての教育を行い、一方、男の子には職を手にする準備として学校に通わせません。学校に通うことが女の子に許される場合、その女の子は家政科や保育科を専攻するように言われます。専攻科目やレッスンの種類の選択には、女性と男性の役割に関する伝統的な考えが反映されています。科目分野も、男性用と女性用に分かれています。このように子どもの扱いを性別で分けるということを、インドネシアの保護者は20年前まで行ってきました。母親も含め保護者は、男性が優位な扱いを受けることを当然とみなしているのです。

こうしたことは、「男の子は泣いてはいけない」「男の子らしく振舞いなさい」「あの子は真の男の子だ」といったような言い回しやことわざにも見られます。一方、女の子はジャワの言葉で「*satru mungging cangklakan*」と呼ばれ、これは、娘は親にとって重荷になるという意味です。

こうした表現が示すように、家庭での教育が男性的な文化の推進につながる、という認識が欠けているのです。男女の区分にこだわりがあり、女性は常に、いわゆる「男性優位」の考えの影を落とされているのです。

■ インドネシアの女性の今

上記の女性の地位に関する説明は、全体的に過去の話です。インドネシアにおける今日の女性の状況は、大きく異なります。つまり、女性たちも、国家の発展に積極的に参画するよう求められているのです。既婚女性も含め、インドネシアの女性は、自分たちの能力を最大限に発揮するチャンスを探しています。30年から40年ほど前は、娘を学校に通わせることは、娘を「破滅への道」へと追いやるようなものでした。しかしながら、現在の女の子は希望する学校へ自由に入学することができます。高校や大学を見事に修了した後、ほとんどの若い女性は社会に出て特定の職を得ます。女性の職業の選択は、教師、助産師、看護師、医師、各種孤児院の院長などの家庭での母親の役割に近いような職業にとどまらず、かつては男性が圧倒的に多かった他の職業の分野にまで広がりを見せています。軍隊に入隊する女性もいれば、現代的なビジネスやコンピュータサービスの世界で働く女性や、公証人、メディアビジネス、ケータリング、広報、マーケティングリサーチ、アートビジネス、劇場な



軍隊に入隊し、整然と並ぶ女性隊員
(コラン・バル新聞より)

どの分野で活躍する女性もいます。今日では、女性が大学で学長や学部長を務めることは、普通のことと考えられています。さらに立法および行政の分野で政策決定に参加する女性が増えていることも注目すべきです。

■ 変革への推進力

消極的な女性の時代から積極的な女性の時代へと変わったわけですが、こうした変化は突然起きたわけではありません。20世紀にインドネシアの女性の地位が向上されるまでに、過渡期があったのです。この過渡期に、中央および地域レベルの双方で、組織を通じて社会活動に自らをささげた女性が数多くいました。さらに、各地の状況にあわせ、宗教、慣習、教育、ライフスタイルの多様化と、女性の地位向上のための活動が推進されました。つまり、女性の運動が女性の生活を変革する最も強力な推進力であるといえるのではないのでしょうか。